

多摩川先人館

[先人No.3] 武蔵野新田開発の功労者

川崎平右衛門定孝 かわさきへいえもんさだたか (1694~1767)

徳川吉宗の命により始まった武蔵野新田開発の世話役として活躍し、玉川上水に名勝「小金井桜」を植えた川崎平右衛門定孝は、多摩川沿いの村、多摩郡押立村（現在の府中市押立村）で生まれ育ちました。



川崎平右衛門定孝

先祖は小田原北条氏の家臣だったという川崎家は、府中大國魂神社社家や日野本陣名主などを縁戚に持つ名主の家で、元禄（1694）年幼名・辰之助として誕生したのが平右衛門です。

（幼少から青年時代については、詳しい資料が残っていません。）

武蔵野台地の開発

享保元（1716）年、八代将軍・徳川吉宗によって、儉約の励行、年貢増徴などで幕府体制の立て直しを図ろうとする「享保の改革」がはじまりました。

享保7（1722）年、この改革の一端として始まったのが武蔵野台地の開発で、82ヶ村の新田をつくり、石高11万2千石の増収を得ようという壮大なものでした。

享保の改革が始まった年、22歳だった平右衛門は、府中市の原野を開墾して栗林を作ったり、押立に竹林を栽培し、水害防備林として機能させることにより、多摩川水防の強化を図りました。

元文4（1739）年4月、一連の功績が認められて名字帯刀を許された平右衛門は、同年8月には大岡越前守に抜擢され、武蔵野新田開発の世話役に命じられるのです。

この新田開発で実績をあげた平右衛門は、押立の堤防改修工事、中流部左岸の両岸20余里に及ぶ公領・私領の堤防や、樋門改修工事にも携わりました。

また職務怠慢などの理由で水元役を解任された玉川兄弟に代わり、玉川上水の維持管理にも深く携わりました。

幕命により、玉川上水にかかる小金井橋（小金井市桜町）の上下流両岸約6kmに渡って2千本余りの山桜を植えのもその一つです。



小金井桜花見の図

桜が植えられた理由としては、いわゆる村おこしとして、また古くからの言い伝えにより桜の花が水の毒を消す作用がある為、あるいは兩岸の土手を花見客が踏み固めてくれるからなど、諸

（明治39年「小金井名所図会」より）

説が伝わっています。

この桜は「小金井桜」と呼ばれ、大正13（1924）年には内務大臣によって史跡名勝天然記念物法の「名勝」に指定され、昭和の初め頃までは玉川上水の土手沿いには茶屋が建ち並び、たくさんの花見客で賑わったそうです。

他にも、新田開発場の飲料水確保のための玉川上水の分水や、江戸への給水安定のための上水掛け替え工事の監督なども行いました。

象の糞で資金調達

新田開発などに伴う多大な費用の調達方法について、面白いエピソードも残されています。

平右衛門らは、インドから来た將軍の象を預かり飼育していました。江戸時代、特効薬の無い伝染病であり死因の一番の原因であった、疱瘡（ほうそう）や麻疹（ましん）に、象の糞を丸めて乾燥させたものが良く効くと聞いた平右衛門は、幕府のお墨付きを取り付けてこれを売り出したのです。そしてこの売り上げを元金として公金貸し付けの運営を始め、利息を新田開発費に充て、更には開発した新田の肥料や、出百姓への働きぶりへの賞金、また厚生資金などと存分に活用したそうです。

自身も農民出身のためか、年貢の取り立て第一であった政策から、絶えず農民の生活安定、農村復興の優先へと変えた、平右衛門らしいエピソードではないでしょうか。

代官職最高の地位に

21年間で約500町歩に渡る新田を開発した平右衛門は、寛保3（1743）年、関東三万石の支配勘定格の代官として大岡越前守の支配下におかれました。

越前守退官後には、支配替により美濃国本巢郡（岐阜県本巢郡）4万の代官となり、ここでも中世中期の河川工事で最大規模と言われる治水工事を行ってこの地域で初めての水門をつくったのです。

宝暦12（1762）年には、石州石見（島根県浜田市付近）国・銀山の代官に、そして5年後の明和4（1767）年、ついには代官職最高の地位である勘定吟味役兼諸国銀山奉行を命じられました。

しかしこの最高職に就いた2ヶ月後、惜しくも江戸の役宅で病没、数々の功績を残した73年間の生涯を閉じます。

年号	西暦	月.日	年齢	略歴
元禄7	1694	3	0	北多摩郡多摩村押立（現・府中市）の名主の子・辰之助として生まれる。
元文2	1737		43	玉川上水の両岸の1里24町（現在の小平市～小金井市）に桜を植る（後の小金井の桜として有名）
元文4	1739	8	45	武蔵野新田世話役に正式に任命される、玉川上水の上水路の付け替え作業が行われる。苗字帯刀を許される。
寛保2	1742～		48	譜請奉行として主として多摩川中流部左岸の府中市押立の堤防改修工事を実施

寛保3	1743		49	多摩川兩岸20余里に及ぶ公領・私領の堤防や樋門の大規模な改修を実施
延享2	1745		51	武蔵野新田開発の功績により、支配勘定格になる
寛延2	1749		55	譜請奉行として主として多摩川中流部左岸の府中市押立の堤防改修工事を実施
寛延3	1750		56	美濃郡の本田陣屋に赴任し、幕府直轄4万石支配代官として、木曾川改修工事―宝暦治水にかかる
宝暦4	1754		60	牛牧閘門（うしき しもん）、木曾川の支流の、五六川の村々を出水の害から守るためこの地に初めて木材で水門を造る
宝暦12	1762		68	島根県の勘定吟味役に昇格、石見銀山奉行を兼ねる。採鉱事業に大きな業績をのこす。
明和4	1767		73	江戸にて没する。

現在、武蔵野新田を開発し、多摩川や玉川上水の治水に貢献し、絶えず農民の立場にとって救済策をも講じた川崎平右衛門定孝を称え、出身地にある「府中市郷土の森博物館」には平右衛門の銅像が、玉川上水に架かる小金井橋近くの「海岸寺（小平市御幸町318）」には、小平市の有形文化財に指定されている小金井桜の碑が建立されています。